

『もっと老上、ずっと老上～学ぶ楽しさ 人のあたたかさ 明日への希望 をみつける学校～』

2020年度 老上小学校だより No.17(11月6日号)

老 おいかけやま通信

①おきなめあてにむかって ②いどみ つづける子 ③か ながえ 深める子 ④み とめ つなげる子 (校長 山崎 賢)

(学校だより、学年通信・ほけんだより、行事予定、下校時刻などは老上小学校HPでもご覧になれます)

(レジリエンスを育むために)

多様性こそが強靱性と思える心の余裕を持ちたい

9月30日のニュースで、アメリカの民間宇宙企業・スペースX社開発の民間宇宙船「Crew Dragon」に搭乗予定の野口聡一さんらの会見の記事が掲載され、その中で今回の宇宙船の名前を「レジリエンス」と決めたことが紹介されていました。(※) 老上小学校では、年度当初から、子どもたちに育てたいこととして「レジリエンス」を掲げているので、今世界的に困難な状況がある中で、大事な概念なのだと再認識したところです。



(毎日新聞 2020年9月30日 17時09分(最終更新 9月30日 21時40分)より)

野口さんは、「レジリエンスという言葉は、ストレス時であっても機能を保ち、逆境を克服することを意味している。恐らく全ての人が、2020年が困難な年だったと考えているはずだ。」と述べ、新型コロナウイルスの感染拡大により、世界的に広がった閉塞感を克服したいという思いを伝えています。そしてもう一つ、「多様性こそが強靱性を生む」ということを強調されました。乗組員のルーツや経歴、主義主張など多様な人材が集まっていることは、一見して対立や批判が起こりそうに見えます。しかし、新しいものを生み出したり、危機的な状況になった時などに多様な考え方ができるようなチームであれば、それぞれの強みを生かしながら、よりよい対応ができるということでしょう。

ただ私たちは、日々の暮らしの中で、周りの人とできるだけ意見や立場が同じであることに安心することがたくさんあります。多様な考えを豊かに受けとめることが大事だとわかってはいるけれど、自分が少数派になることに不安が大きかったり、自分の考えが否定されたと思ってしまうことも多く、多様性を強靱性として受け止めるには、まだ少し心の余裕がないのが日常です。

しかし価値観が同じような集団は安心である反面、いわゆる「同調性」が求められ、そこから逸脱することを許さない風潮が生まれがちです。閉じた職場や学校では、往々にしてそのようなことに陥りがちなので、いじめやハラスメントが起きやすくなるということは、過去の事例や様々な報道などにその現実を見ることができます。



「大変ですね」という言い方が半ばあいさつ代わりに使われるようになって久しくなりました。社会の変化のスピードが速くなり、人の価値観が多様化する中で、個人が抱えるストレスも年々大きくなってきています。何が大変なのかといえば、組織で仕事をしている人なら労働時間の問題や職場の人材不足の問題、仕事内容への不満などが出てくるでしょうか。家庭での仕事に関してなら、することが多いとか時間が少ない、また、他の人が何も手伝ってくれないなどの大変さを挙げる人も多いことでしょう。

では、思い当たる「大変だ」という具体的な要因がうまく解消できれば、また、なくなればもっと生

産的なことができるのかといえば、案外そうでもないかもしれません。多くの場合、大変だということ
を他の人に示すことによって自分の価値を認めてほしいという願いがあからです。大変な中で自分が
どれだけがんばっているか、どれだけしんどい思いをしているかを分かってもらいたいという心の働き
があります。

もちろん、そのような人の頑張りによって、組織としての仕事や家庭生活、また平穏な日常生活が営
まれているのは間違いのない事ですから、当然評価されてしかるべきです。しかし、みんなが何かに追
い立てられて、人を認め評価する余裕がないので、多くの人が「認められ感」を得にくいのが現状では
ないでしょうか。ですから、「大変だ」ということを示すことで、他の人にも頑張っていることを知って
ほしいと願うのは、当然のことでしょう。



また、「大変」の中には人間関係のしんどさも多く含まれています。今の社
会では、仕事や活動そのものよりも、それに関係する人との関わりで大変さ
を感じるの方が多いいものです。なんととっても相手があるものですから、
自分だけではどうしようもないことが多くなりがちです。また、社会が以前
にもましてグローバル化してきているので、自分とは違う環境の中で価値観
を形成してきた人たちと同じ空間で過ごすことに不安感を覚えるのも当然です。でも、私たちの社会は
そのような考え方の違いの中で発展していくものですし、お互いの考えの違いに折り合いをつけて日々
が営まれることで成り立っているのです。これからの社会を担う子どもたちには、このような価値観の
違いをしなやかに受け止め、相手を非難したり自分を卑下したりすることなく、尊重し合える関係を作
れる人間に育ててほしいと思うのは、多くの大人の思いではないでしょうか。

しかし、人々や社会の価値観が多様化すればするほど、確実な子育てや人材育成の方法があるわけ
ではないので、褒めることが大事だと言われれば極端に褒めたり、叱ることも大事と言われれば必要以上
に叱ったりすることがあります。そしてその結果、褒められることを期待して自分だけが良ければとい
う考え方や行動になったり、叱られないための予防策に奔走して自分に素直になれない子どもたちの姿
もたくさん見てきました。このような姿を見せる内面には、自分は本当に必要とされているのかとい
うことへの不安が大きいように思います。

心理学者のアルフレッド・アドラーは、『行動するたびに叱られ、褒められて育った人間は、褒められ
るか叱られるかしないと行動しなくなる。「よくできたね」と褒める必要はない。ただ「ありがとう」と
感謝を伝えるだけでいい。』と言います。これをいわゆる「貢献感」とアドラーは呼んでいますが、これ
までのおいかみやま通信では「自己有用感」と呼んできました。だれかの役に立っている（貢献してい
る）と感じる経験が、自信ややりがいにつながります。

職場や家庭でお互いに「ありがとう」と声を掛け合える関係を築いていくことは、人は尊敬し合うこ
とにつながります。その中で多様性を認められることは、自己有用感を育むこととなります。今さら言
うまでもなく、日本でもおよそ 100 年前の水平社宣言に「この際、我らの中より人間を尊敬すること
によって自ら解放せんとする者の集団運動を起こせるはむしろ必然である」との謳われているように、自
分自身の心の持ち方が今まさに一人一人に求められているのです。お互いを尊敬し合う関係の中なら、
「大変ですね」もちょっと誇らしく、充実感のある大変さになるでしょう。そして、その関係の中で多
様性を強靭性を感じられる心の余裕を少しでも持てたらと思います。

(※) スペース X のクルードラゴン、野口聡一宇宙飛行士を乗せていよいよ宇宙へ「多様性こそが強靭性」

(<https://news.yahoo.co.jp/articles/9dc5ad3a5b721c7807b6628f61083afad2cb9519/images/000>)より